

# ジュラシック・トーク

## Part 1 ヒンデミットによるカバー

今回ニューフィルが初めて演奏することになったヒンデミットの「ウェーバーの主題による交響的変容」には、その名の通り演奏会ではこの曲の前に演奏される「オベロン」序曲の作曲家、ウェーバーの作品からのテーマが使われています。その原曲を実際に聴けるようにしてみました。

それぞれの QR コードを読み取れば、曲が聴こえます。

### 第 1 楽章

【8つの小品 Op.60 より第4曲】

4手連弾用の曲です（右が楽譜の表紙）



### 第 2 楽章

【劇音楽「トゥーランドット」序曲 Op.37】

この曲に関しては「かいほうげん」の前号 (Nr.266) で詳述されているので、そちらを参照してください。

今回の音源は、フル・バージョンです。



### 第 3 楽章

【6つの小品 Op.10a より第2曲】

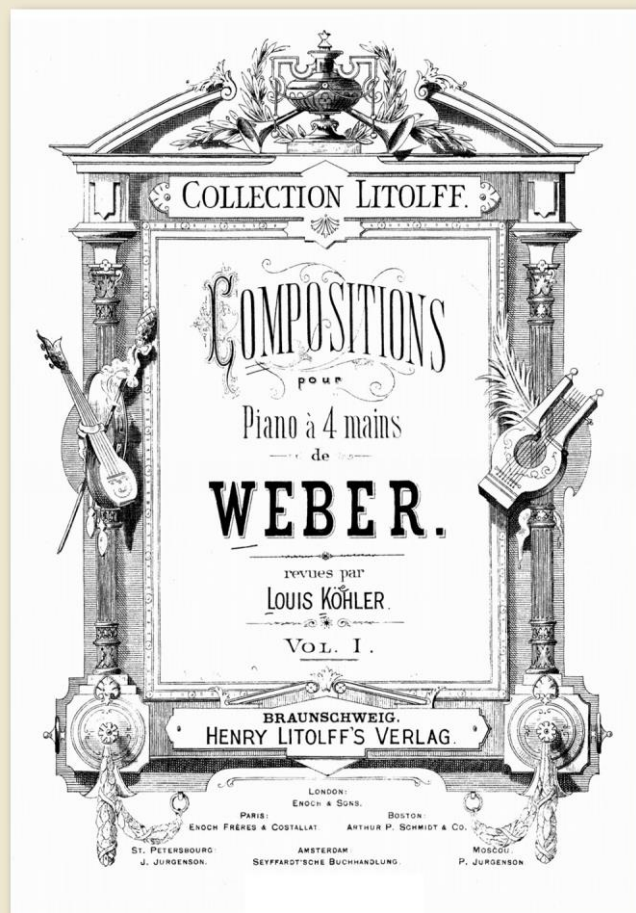
4手連弾用の曲です（右が楽譜の表紙）



### 第 4 楽章

【8つの小品 Op.60 より第7曲】

4手連弾用の曲です（右が楽譜の表紙）



お聴きになってお分かりだと思いますが、ヒンデミットはウェーバーの原曲に単に鮮やかなオーケストレーションを施しただけではなく、彼自身の作曲技法を用いて、細かいところで音型やハーモニー、さらには曲の構成を変化させています。それは、まさに「変容」（「カバー」とも言う）と呼ぶにふさわしいもので、時にはユーモラスに聴こえてくる部分すら存在します。

そんな一例が、第3楽章の中間部、短調で始まった曲が長調に変わった時に現れるテーマです。

ウェーバーのオリジナルは、こんな楽譜です（先ほどの音源の 1:21 付近）。



これがヒンデミットの手にかかると、まずキーが変わります。



そして、最後の小節のターンの後の音にフラットが付いて、まるでジャズのブルーノートのような怪しげな雰囲気が漂い出します。

ヒンデミットがこのように他の作曲家の作品を元に作ったものの中で、異彩を放っているのが、ワーグナーの「さまよえるオランダ人」序曲を弦楽四重奏のために「編曲」した「朝の7時に、湯治場の二流の保養楽団が初見で演奏しているような、『さまよえるオランダ人』の序曲」ではないでしょうか。実際に演奏している映像があるので、ご覧下さい。4:50 あたりでは先ほどのウェーバーと同じことをやっています。



Paul Hindemith "Obertura de 'L'holandès errant" de Richard Wagner, com la tocaria una mala orquestreta de balneari a primera vista a les 7 del matí a la placeta de la font" per a quartet de cordes



こちら(↑)で楽譜が全曲閲覧できます。

こんなお茶目なヒンデミットですが、逆に彼の作品が「カバー」されたこともあります。それを行ったのは、「テクノ・ポップ」の始祖、「クラフトワーク」です。彼らが1983年にリリースしたシングル「ツール・ド・フランス」には、ヒンデミットの「フルートソナタ」のテーマが使われているのです。



こちら(↑)がクラフトワーク(アルバム・バージョン)



そしてこちら(↑)がヒンデミット

実は、ヒンデミットは「テクノ」には欠かせない楽器シンセサイザーの最初期のタイプ、ドイツで作られた「トラウトニウム」(→)という楽器の開発に関わっていて、この楽器のための曲も作っています。ですから、そもそも「テクノ」とは浅からぬ因縁があったのですね。

